モンゴル語訳『法華経』管見（下）*

樋　口　康　一

本稿は、既に本論集において発表済みの樋口（2012）及び樋口（2013）を承けてその結びとするものであるが、稿を成すにあたり、これら２編との間に若干の時間が経過してしまった。これは、この間、筆者が前２編で提案したトルファン出土断片の読みを改める（より正確には付け加える）必要が生じたからにほかならない。

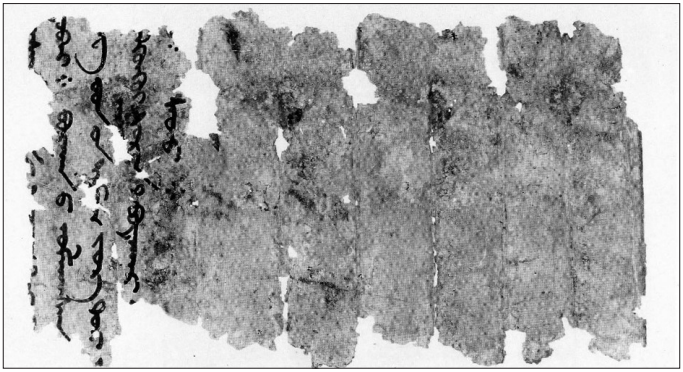
その補遺は２葉の断片中のひとつ Berliner Turfan Texts XVI 28 の読みに対するものである。それを含めたうえで筆者はモンゴル語訳『法華経』に関する議論を各々国際学会で発表した上、Higuchi（2013a）Higuchi（2013b）Higuchi（2014）として公けにし、またこれらとは別に2014年７月に開催された第51回野尻湖クリルタイ（日本アルタイ学会）においても発表して世に問うてきた。特段の異論もなかったので、容れられたものと筆者は判断している（もっとも、筆者の発表については、世界のどこで発表しても、異論どころか質問らしい質問も出ないのが常である）が、そもそもの出発点となった樋口（2012）及び樋口（2013）そのものについては、本論集にこれらに引き続いて所要の補遺を含んだ下編を掲載する機会がないまま時日が経過してしまった。

ところが、周知の通り、この間に法文学部人文学科を取り巻く状況は構成員の意思とはそぐわぬかたちで激変し、学部の在り方はもとより本論集の発行形態にも大きな変化が生じようとしている。結びに相当する部分が存在しないまま、その日を迎えるのはなんとも心残りでならない。

そこで、本稿においては件の補遺を、改めて日本語で論じる。そのうえで、未完成の部分もなお少なくはないが、モンゴル語訳『法華経』の成立過程に関する仮説を紹介することを敢えて試みたいと考えた次第である。ご寛恕を乞いたい。

９．トルファン出土モンゴル語訳『法華経』写本断片その１　補遺

問題の BTT XVI 28 を再掲する[1)]。



これに対して Cerensodnom-Taube の掲げた読みは、以下の通りである：

(1)　*[……]**ɣsan** [...]**n-i***（あるいは***-W***）***l**[……]*

(2)　*[……]**WB'Y :: burqan-u nomlaɣsan***

(3)　*[....bodist]**v-ud-un qam**[u]**ɣ ǰug-tür***

(4)　*[...]**lgüngüi neret**[ü] **qorin tabudaɣar***

(5)　*[....] **:: saṯu ::***

「(1)［…］した［..］のを［…］(2)［…］WB'Y。仏の語った(3)［…（菩）薩］のあらゆる方角において(4)［…］という名の25番目の(5)［…］。善哉。」

モンゴル語訳のABにおける対応個所は以下の通りである。

A　deger-e ügei üneker toγoluγsan bodi qutuγ-tur sedkil egüskeldübei : čaγan linqu-a neretü degedü nom-ača : ariy-a avalokiti isvari-yin qubilγan+i üǰegülügsen büküi-eče egüden boluγsan neretü qorin tabtaγar ǰüil tegüsbe :: : ::

B　deger-e ügei üneker toγoluγsan bovadhi qutuγ-tur sedkil egüskeldübei : čaγan lingqu-a neretü degedü nom-ača : aariy-a avalovakita Suvari-yin qubilγan-i üǰügülügsen büküi-eče egüden-ü neretü qorin dötüger bölüg :: : ::

「（八万四千の衆生はこぞって）無上の円満な菩提に発心したのであった。白蓮という名の最勝経のうち、『観世音菩薩の変化を示した四方からの門』という名の第25章が終わった。」[2)]

樋口（2013）では、この個所は次の通り読むべきであると主張した：

(1)　*[……]**γsan** [...]**n-i***（あるいは***-W***）***l**[……]*

(2)　*[sekil egüskeld]**übei :: burqan-u nomlaγsan***

(3)　*[....bodist]**v-ud-un qam**[u]**γ ǰug-tür e**[güden]*

(4)　*[...]**lgüngüi nere**t[ü] **qorin tabudaγar ǰ[üil]***

(5)　*[....] **:: saṯu ::***

「(1)［…］した［..］のを(2)［発心］した。仏の語った(3)［…菩薩］のあらゆる方角に向いた門(4)［…］という名の25番目の［章］(5)［…］。善哉。」

すなわち、対応するABの形式を参照して、紙面にわずかながらも残されている文字の一部を含む形式が何かを考察し、(2)行目では *sekil egüskeld-*「発心する」、(3)行目では *e[güden]*「門」、(4)行目では *j[üil]*「章・品」が復元できる

と推定したのである。

樋口（2013）の成稿後さらにこの断片を精査した筆者は、手つかずのまま放置していた⑴行目及び⑷行目の冒頭部分について、新たな読みの可能性を着想するに至った。

まず、⑴行目の ***[...]n-i***（あるいは***-W***）の部分㈠は、仔細に見れば、⑵行目の ***burqan-u*** ㈡の末尾 ***n-u*** と酷似していることがわかる：

㈠

㈡

これに続く部分については、これだけでは何かを判じることは難しいが、さらに同じ⑴行目を下ると、⑶行目の ***tür*** ㈠の右半分を思わせる部分㈡があるのが見える[3)]。

㈠

㈡

さかのぼり、その直前の個所㈬は、きわめてわずかな部分しか残ってはいないものの、(3)行目の ***qam[u]ɣ*** ㈫の初頭とよく似ている。つまり、文字《Q》の語頭形と見ることが可能である。

㈬

㈫

㈭

これらの断片的な読みを総合したとき思い当たるのは、仏典で頻用される表現 *burqan-u qutuɣ-tur*「仏の尊さに」に他ならない。実際、破損している㈠の直前部分と㈠を合わせた長さ、ちょうど㈡の ***burqan-u*** の長さとほぼ等しいのである。

この部分のさらに上にわずかに見える部分㈭は ***-ɣsan*** と読まれている。この読みはおそらく正しい。では、これを一部に持つ形式でこの文脈にふさわしいのは何であろうか？それは、*burqa* の epithet（添え名もしくは枕詞）として仏典で多用され、事実、AB 両系統においても見出される *üneker toɣoluɣsan*「真に打ち勝った」にほかならない。もしこれが正しいとするなら、この形式の前にはさらに AB 同様に *deger-e ügei*「無上の」及び仏典で頻出する「仏」の別の枕詞 *dayin-i daruɣsan*「敵に打ち勝った」が存在することが想定できる。なお、AB に照らせば、*burqan*「仏」ではなく、*bodi*（<<Skt. bodhi「菩提」=悟り）が期待できるし、Cerensodnom-Taube もおそらくそれを念頭において、㈠に ***n-i***（あるいは***-W***）という読みを与えたのであろう。事実、漢訳の対応箇所にあるのは「菩提」なのである。しかし、筆者の見る限りでは、これを ***n-i*** と読むことには無理がある。対応するウイグル語形式を参照できればどちらであ

るかを決定することは容易である（し、仮に *burqan* であれば、その含意するところは大きい）が、遺憾ながらこの部分に対応する箇所は存在しない。幸い、*deger-e ügei dayin-i daruγsan üneker toγoluγsan burqan* も仏典ではよく使われる表現であるから、この箇所に存在したとしてもあながち不自然とはいえない。ここでは、これをこの部分の読みとして提案する。

この断片が本来はどの程度の大きさであったのかを知るすべはないものの、これらの推定形式がすべて同じ行に配置されているとは考えにくい。ここでは仮に *toγoluγsan* より前の部分はこれを遡る１行（さらにはそのもう１行）前に記されていたものと見なしておく。

この断片では行頭から行末まで完備した行は存在しない。各行の書き出しは同じ高さに揃って並べられたであろうことは想像に難くない。筆者及び Cerensodnom-Taube が想定する各行の書き出しは、⑴ *nomlaγsan* ⑵ *egüdbei* ⑶ *bodistv* で、概ね同じ程度の長さになる。Cerensodnom-Taube は、⑶ *bodistv* の前にさらに何かがあると想定しているが、行頭の高さが同じであるとすれば、これは支持できない。

一方、行末については、もうひとつの断片を見る限りでは、揃ってはいないし、それはこの断片にも当てはまるものと考えてよい。一般的にモンゴル文字では一続きに表記される形式を２行にまたがって書くことはしないものである。

そこで、気がかりとなるのは⑴行目最下部である。文脈上ここに来る可能性があるのは本文でも論じたとおり Mo. *sedkil*「心」なのであるが、直前の形式㈡に想定した読み *–tur* の次にある文字の断片（単なる紙の汚れにしては濃すぎる）が期待される文字《S》の語頭形にしては、いささか小さすぎるのである。同じ断片の最終行にある Mo. ***saṯu***「善哉」の語頭にそれがあるが、行の右側に鋭角的に突き出ている部分が目を引く。⑴行目の行末の文字断片はここまでは鋭角的には見えない。

ただ、もうひとつの断片の⑻行目にある ***šamnanč*** の語頭にも《S》があり、こちらはそれほど鋭角的ではない。もちろん、同じ手によるものかどうか、大

いに検討の余地はあるが、仮説的にここでは Mo. *sedkil* の語頭の一部であると見なすことにした。

もうひとつの補遺は、⑷行目冒頭の㈦に関わるものである。

㈦

これを Cerensodnom-Taube は*[...]**lgüngüi*** と転写している。たしかに、こう転写することもできるが、明確に読み取れる部分 ***lgüngüi*** を含む形式は実在しない[4)]。筆者は、AB における対応部分を参照した上で、そこにあるA üǰegülügsen B üǰügülügsen（ともに「教示した」）に着目し、これが*[üǰe]**gülküi*** もしくは*[üǰü]**gülküi***（ともに「教示する」）の誤記である可能性を指摘したい。つまり、文字《L》を打つ位置を誤ったのではないかと考えるものである。この断片は、Cerensodnom-Taube は同じ⑷行目に置いており、また実際その位置になければおかしい ***neret**[ü]*（「という名の」）が現実には⑶行目と⑷行目の間に、後から書き加えられたかたちで記されていることが示すように、書写の習作的な色合いが否定できないしろものである。これを踏まえれば誤記があったとしても怪しむには足りない。ただし、現実の形式を無視することはできないので、これを*[üǰe]**lgünküi**[sic]*と転写し、翻訳する際には「教示する」という訳語を与えるものとする。

以上に基づくなら、この TEXT28 は以下のように転写されるべきであると考えられる：

(0)　*[deger-e ügei dayin-i daruɣsan üneker]*

(1)　*[toɣolu]**ɣsan** [burqa]**n-u qutuɣ-tur***

(2)　*[sedkil egüskeld]**übei :: burqan-u nomlaɣsan***

(3)　*[....bodist]**v-ud-un qam**[u]**ɣ ǰug-tür e**[güden]*

(4)　*[...]**lgünküi**[sic]**neret**[ü]**qorin tabudaɣar ǰ[üil]***

(5)　*[....] **:: satu ::***

「(0)［無上の、怨敵に打ち勝った、真に］(1)［超越］した［仏］の尊さに対して(2)［発心］したのであった。仏の語った(3)［…菩薩］のあらゆる方角に向いた門(4)［を教示］するという名の25番目の［章］(5)［…］。善哉。」

10. おわりに　── モンゴル語訳『法華経』の成立過程

樋口（2012）及び樋口（2013）も含めて、以上で明らかとなった事実を改めてここで列挙する：

① 現存する『法華経』のモンゴル語訳はどれも17世紀以降の開版もしくは書写にかかるもので、これには２系列ある。これを各々 ABと名づける。また、これとは別にトルファン出土の写本断片が存在する。

② 章の数と配列順序に照らすと、A系列とトルファン断片は、漢訳及びウイグル語訳と平行している。一方、B系列はチベット語訳と平行している。

③ ただし、両系列間で行文が著しく異なることはない。

④ A系列の版本には「チョスキ・オッセルの元訳をシレート・グーシの別訳を参照しつつ、エルデニ・メルゲン・ダイチン・タイジが改訳した」旨の、実在の歴史上の人物に言及した奥書がある。

⑤ トルファン断片は、行文のみならず、使用されている言語形式の面で

もウイグル色が極めて濃厚である。

⑥　ABの両系列にあっては、ウイグル色はそこまでは濃厚ではないが、中期モンゴル語特有の形式が多数保存されている。

⑦　ABの両系列に散見できる誤訳はチベット語訳に照らして初めて説明可能なものばかりである。

⑧　ただし、Aにある誤訳がBで修正されている事例は少なくないが、その逆は存在しない。

以上の事実から確実に推定できることは、以下の通りである：

①　言語形式の特徴に照らせば、トルファン断片はウイグル語訳からの重訳であり、その製作年代は中期語時代、おそらく13世紀末から14世紀初めであると見てよい。

②　微小な断片であるため、断言はしかねるが、誤訳を免れた訳文と判断できる。

③　ABの両系列（の原本）はチベット語訳の重訳であり、その製作年代は同じく中期語時代であるが、トルファン断片よりは少し時代が下る時期のものと見なしてよい。

④　したがって、上記の奥書の記載はまったく措信に値しない。

⑤　B系列はA系列の改訳であるが、その改訳作業はきわめて粗雑なものであると考えるほかない。

⑥　また、これらに残された誤訳から推察するに、翻訳者（改訂者）の知識や技量はトルファン断片の翻訳者から見れば、かなり見劣りがすることは疑いない。

おそらくここまでは大方の異論なく受け入れられるものと思われる[5)]。大きく立ちはだかるのが、事実の②と④であろう。AB両系列ともにチベット語からの重訳であるのに、なぜ、敢えてA系列ではチベット訳とは異なる、漢訳や

ウイグル語訳と同じ章数や章立てを採用しているのか？そして、奥書にはおよそ事実とは思えない記載があるのか？以下は、その検証が今後の課題であることは言うまでもないが、これまで得られた知見に基づく仮説である。

トルファン断片（の原本）はチョスキ・オッセルかもしくは彼同様にいくつかの言語に通じた僧侶がウイグル語版から翻訳したものであろう。他方、A系列においては、おそらく、本来はチベット語版に依拠して作成された原テキストの章数や章立てを、敢えてウイグル語版に依拠する形に、急遽改めたものと思われる。なぜこのような不自然なことを試みたのかといえば、チョスキ・オッセルの名声を意識したからにほかならない。それがいつのことであったか、詳細は今後の解明にまつしかないが、彼が活躍していた元朝時代の仁宗アユルバルワダの治世（1311－1320）であったか、もしくはその直後であった公算は低いと考えられる。

近年、モンゴル時代及びそれ以前の東部ユーラシアにおける言語状況や仏教伝播に関する新たな知見が続々と提出されている。それを通じて、この地域の主要な言語であるソグド語・ウイグル語・漢語・チベット語そしてモンゴル語の接触のありようも明らかにされつつある。先にあげた中村（2007）もその試みのひとつである。そこでは以下に要約できる仮説が提案されている：すなわち、当初ウイグル語がリンガ･フランカとして機能していたモンゴル宮廷において仏典で使用されていた言語はモンゴル語ではなくウイグル語であった。元朝がチベット仏教を、王権を支える宗教として導入した後、チベット語からウイグル語に仏典が翻訳されるようになる。その趨勢に棹差したチベット出身のチョスキ・オッセルらは、チベット仏教の浸透にともない高まったモンゴル語仏典の需要に対して、ウイグル語仏典をモデルとしてモンゴル語仏典を翻訳することで応えた、というものである。中村の筆致は慎重であり、翻訳されたモンゴル語仏典の原典は何語で記されたものかについては明言していないが、筆者はウイグル語、チベット語両方の可能性があると考えている。仮説の上にさらに仮説を重ねることにはなるが、中期語の特徴とウイグル的な色彩の濃いトルファン断片が存在する一方で、同じく中期語の特徴を有してはいても、チ

ベット語版に依拠しそこまではウイグル的な色彩が濃くはない原本を反映したABが存在する『法華経』のモンゴル語訳はその好例と見なし得るものである。

第４節で述べた、「チョスキ・オッセルの原本をエルデニ・メルゲン・ダイチン・タイジがシレート・グーシの別訳を参照しつつ改訳した」旨の奥書の記載は、もちろん歴史的事実を記したものではない。ただ、そこには、各々に擬せられた無名の翻訳者XYZの所業がそれなりに反映されているとおぼしい。すなわち、『法華経』の最初のモンゴル語訳はウイグル語版からの重訳であり、それは元朝時代のことであった。携わったのはチョスキ･オッセル当人ではないにしても彼に比肩し得る多言語に通じた僧侶であったに違いない。トルファン断片はこれを書写したものであろう。これに続きXの手によるチベット語版からのモンゴル語訳（＝Aの原本）が元朝時代に世に出た。残念ながら彼の力量はトルファン断片の翻訳者には遠く及ばないものであった上に、おそらくその作業は急を要するものであったと思われる。時が経ち、17世紀になってモンゴル語仏典に対する需要が高まった時、やはり力量に不足のあるZがAの原本をこれまた短時日で拙速に改訂した（＝Bの原本）。その改訂版を参照しつつ、チョスキ・オッセルの権威にあやかろうとしたYがAの章立てや章数を、敢えてウイグル語版に合致するように改めたのではないか[6)]。一方、チベット仏教を信奉する清朝が企てたモンゴル大蔵経の編纂にあたっては、チベット語版に忠実なB系列が底本として採用されたが、その編纂作業もまたそれにともなう改訂も拙速きわまりないものであった。

あくまでも作業仮説ではあるものの、この仮説に照らせば、先の矛盾する二つの事実②と④は整合的に説明できると考える次第である。

参考文献

中村健太郎（2007）「ウイグル語仏典からモンゴル語仏典へ」『内陸アジア言語の研究』22 pp. 71-118　中央ユーラシア学研究会

樋口康一（2012）「モンゴル語訳『法華経』管見（上）」『愛媛大学法文学部論集人文学科編』33　pp. 23-41　愛媛大学人文学会

樋口康一（2013）「モンゴル語訳『法華経』管見（中）『愛媛大学法文学部論集人文学科編』34　pp. 41-57 愛媛大学人文学会

Higuchi, K.（2013a）Linguistic and philological value of Mongolian Buddhist works. *Монголские языки: истрия и содреиенность*. pp. 48-52 Российская Академия Наук Институт Лингвистических Исследовали. Санкт-Петербург. 2013

Higuchi, K.（2013b）Mongolian Versions of the *Lotus Sūtra;* Their chronology and its implications. *Synchronic and diachronic studies of Altaic languages* pp. 13-17 The Altaic Society of Korea, Institute of Altaic Studies, Seoul National University. 2013

Higuchi, K.（2014）How were Mongolian versions of the *Lotus Sūtra* translated, compiled and transmitted?; through examination of the Turfan fragments. *АКТУАЛЬНЫЕ ВОПРОСЫ ТЮРКОЛОГИЧЕСКИХ ИССЛЕДОВАНИЙ,* pp. 317-330　Санкт-Петербургский Госдарственный Университет Внсточны2й Факултет.

＊　本研究は、平成25-27年度科学研究費補助金・基盤研究（C）（一般）「モンゴル語仏典を活用した中期語における言語接触と言語変容の研究」（研究代表者：樋口康一）による研究成果の一部である。

1）樋口（2013）を踏襲して、Cerensodnom-Taube の掲げる行文は斜体字で、これに対応するモンゴル語訳ABの行文は正立字で表記するトルファン出土本については、Cerensodnom-Taube の転写法を採用した。前者の中で［　］内は、Cerensodnom-Taube が補った箇所で、日本語訳の中の［　］内はおおむねこの個所に当たる。明瞭に読み取れる形式は太字とし、Cerensodnom-Taube の読みを忠実に再現した。

2）これはAに対する訳文である。樋口（2013）のものを少し改めた。Bは「白蓮という名の最勝経のうち、『観世音菩薩の変化を示した、四方からの門』という名の第24章。」で、形式上の細かな相違を別にすれば章名の大意は変わらない。

3）-tur/tür は与・位格語尾である。母音が異なるが、これは音素表記上のもので文字としては区別されない。

4）g と k は同じ文字で表記されるから、この文字連続には４通りの読みの可能性があるが、そのどれもが実在する形式のなかには存在していない。

5）ただ、③については、慎重を期する論者であれば、ABの製作年代をより近代に近づけることもあるかもしれない。しかし、そう考えるには、既に見たとおり、ABに出現する古形はあまりにも古すぎるのである。

6）ウイグル語に依拠したモンゴル語訳はこの時既に存在しなかったか、あるいは万が一、存在していたとしてもあまりにもウイグル色が濃厚で古色蒼然としていたため、顧みられなかったものと思われる。仮に存在していなかったとしても、ウイグル語版が漢訳に基づいていたことは知られていたであろうから、後者を参照しつつ章数や章立てを改めることは容易であったに違いない。なお、付記するなら、14世紀と17世紀に高まりを見せるモンゴル語仏典の需要については、その質も考慮する必要がある。少なくとも17世紀の需要の内実は、とにかくモンゴル語で記されておればそれでよいというものであったと思われる。これまでに見た初歩的な誤訳の放置はそれを雄弁に物語る証左である。